



Nature

人生の気だるさ日和

Nature

1. 夜空に閉じ込められて

Lyrics : 白サイ feat : 藤宮遊鳥 Original : 「幻視の夜 ～ Ghostly Eyes」

2. Flowering terror

Lyrics : 空蟬 vo : 藤宮遊鳥 Original : 「眠れる恐怖 ～ Sleeping Terror」

3. Doll's dance

Original : 「人形裁判 ～人の形弄びし少女」

4. 桜よ舞え、願いのために

Lyrics : 藤宮遊鳥 vo : 藤宮遊鳥

Original : 「遠野幻想物語」「ティアオイエツォン (withered leaf)」

5. 月に光る弦

Original : 「シンデレラケージ ～ Kagome-Kagome」

Original songs written by ZUN (上海アリス幻楽団)

All Songs Arranged by KAT

夜空に閉じ込められて

Lyrics：白サイ

月が無く、時折風が強く吹く夜
漆黒の雲海が足元に広がっている
隔絶された空間と、それを包む幾千の瞬き
どんな日も、無理に求めずとも手に入る、美しい現実がここにはある
心地よい空気は雨に溶けて、太陽は天高く駆け昇るようになったけれど
この時間、この高度の美しさは変わらない
ゆっくりと、静かに流れる星々は、今このときも表情を変えて
気付かないほどに小さな変化を繰り返し、短くなった夜を彩り続ける
そして美しくも寂しき空にふと流れ星が一つ、叶わない願いごとを一つ
——どうか、夜が終わりませんように

Flowering terror

Lyrics：空蟬

私は願う あの頃に
闇に震えて小さくなった
冷たく沈んだ心に
眠りと安らぎを与えてくださいと

なぜゆっくりとその歩みを
こちらへ向けているのでしょうか
そこからでも 届くでしょう？
冷めた歌で暗く花束染めて

風が吹き抜けていく
知らない街の中で
私は何を求め
どこへと向かっているのだろうか
叫ぶことを忘れて
もがくこの心には
祈るものも無くて
ただ静かに時が流れる

世界はいつから私の心奪った？
鼓動さえも いつしか聞こえなくなっていつて
静かに落ちた花卉に重重ねて
誰もいないその世界に独り意識潜めた

星はどのくらいまわった？
考えることに既に意味は無く
宇宙までもが変ったこの世に
そのままの姿はありえたの

幻想の世界に身をあずけ
浮かべてよ 思いの風景
この空だけは見ていたかった
あの頃の夢を映してほしくて

桜よ舞え、願いのために

Lyrics：藤宮遊鳥

白く染まった世界は静かで孤独で 声を出しても響かずに吸い込まれていく
雪の降り積もった木々の間から差し込む 光は穏やかだけど春はまだ来ない

昨日つけた足跡 溶けて消えてく はずなのに
また降りた雪に隠されて 夢のように消えた

染めるように 舞い踊れ 桜の花びらよ
優しき雨となりて

訪れぬ季節を誘い導いて
恵みが降り注ぐよう

次の季節はまだ遠いというのか 真白の大地に祝福を
踊りましょう 緑溢れ鳥がさえずるようにと
暖かな陽射しよ降り注げ 新たな命が生まれくる為に
歌いましょう 美しく花が咲き乱れるようにと さあ



「ブチ猫と花と太陽と」

作：白サイ

絵：灯子



「あれ、また来たの？」

うな～～

春の長閑な空の下、花の手入れをしていた紅魔館の門番、紅美鈴は足元に擦り寄ってきた可愛らしい侵入者を抱き上げた。

名も無いブチ猫。ちょっと傷があるくらいで首輪も何もない、どこにでもいそうな猫。

地面に降りて頭を撫でると、ブチ猫は暴れることも無駄に動くこともなく、かといって眠るわけでもなく、気持ちよさそうにのんびりゆったりとし始める。

「あのね、私ずっと変な名前前で呼ばれてるって何度も言ったでしょ？」

理解しても憶えてもいないだろう。けれど、美鈴には特にどうでもよかった。

取り敢えず、日々のストレスを愚痴として吐き出されれば、それは誰でも良かった。

袖を捲り、雑草を抜きながら、だらけるブチ猫に話しかける。

「紅白の巫女も白黒の魔法使いも、紅魔館のみなんだって……」

このことなんか特に、一体何回言ったことだらうか。

来てくれるたびに毎回言ってるはずだ。

「もう私の名前普通に呼んでくれる人ってほとんどいないの」

うな～～

……時々言ってるすごく悲しくて、涙が出ることもあったりする。

そんなときも、猫は変わらぬ鳴き声を上げる。

「……紅美鈴、中国じゃないもん……………」

「——中国……………」

「……………は……………」

目の幅の涙を流しながら、美鈴は返事をした。泥だらけの手をバケツの中の水で洗い流し、手で水を払ってから、猫を摘んで下ろした。「丁度いいから、終わったら食べるもの持ってくるから待ってね？」

うな～～

……なんか嬉しそう。やっぱり言ってること分かってるんじゃないかコイツ？

そんな風に思いながら、この猫がますます可愛く思えてきた美鈴は、館の中に走る。あまり門をほったらかすことも出来ないで、急いで……………

……………

「———ありがとぅ、助かったわ」

「いえ、大丈夫ですよ」

レミリアが『模様替えるわ』と言い出して、人手が足りなくなったらしかった。

……まあ、ほとんどが妖精メイドで力持ちってわけでも全然くないから仕方ない。

実質咲夜と美鈴が行った模様替えだったが、結局のところレミリアの気まぐれで、家具の移動はあっちこっちに動かし挙句最初の場所に戻すこともあったりした。

ベッドを動かす際などレミリアはそこから下りることはなく、悠々と寝転んでいたくらいだ。

「……………あ、そうだ。咲夜さん」

「ん？」

「残飯とかありません？」

x 中国

o 紅美鈴



「また？ あるけど……………そんなに空腹？ 夕食もすぐなんだけど」

「私じゃないです」

取り敢えず手際よく用意された残飯は適当な鍋に入れられて、美鈴に手渡された。

「お腹壊さないでよ？」

「だから私じゃないですって……」

「調子崩しても自己責任だから」

聞いちゃいない。

結局最後まで勘違いされたまま、美鈴は花畑へと戻る。

……しっかりと、プチ猫は待っていた。最初下ろした場所から動いていないような気がする。

「はいこれっ」

うな~~~~~っ

すごく嬉しそうだ。もう今にも飛びついて……………きた。

「痛っ！？ ちょっと爪立てないでよっ、破れるからあ！」

食い散らかされても困るので、隅っこの方へ誘導し、鍋を地面に置く。

すぐにガツガツと食べ始めた。

「すごい食べっぷりね」

聞いちゃいない。さっきの反応とは大違いだ。

以前こんな風にして食べてるところを撫でようとしたりものすごく威嚇された上にひっかかれたので、見るだけ。

ものすごい勢いで食べて、かなりの量があったと思われた鍋は空になる。

「あんた化け猫？」

疑いたくなるくらい大量に食したプチ猫は、すごく満足したのかよろよろとした足取りで、帰ってゆく。

その後姿も微笑ましく、美鈴は門の外へ出て行くまで後ろについて歩いた。

「……………また来てね」

手を振って、夕暮れの空の下、プチ猫を見送っ

た。

そのあとは花の手入れに戻り、警備の部下と門番を変わり、しばらくすると夕食で呼ばれた。

……しかし。

出された皿の上に盛られている料理を見て、美鈴は咲夜に異を唱える。

「……………あの」

「ん？」

「少なくないですか？」

目に見えるくらい。

「あれだけキレイに食べたんだから少しでいいかと思ったんだけど」

「だから私じゃないんですって……」

結局、皿は追加で持ってきてもらったが何故か量は普通の二倍ほどにされてしまい、残すわけにもいかないので、美鈴はすごく頑張って全部食べきった。その時はレミアでさえ感嘆の声を漏らすほどだった。

……おかげでその食後、美鈴は大食いが出来る程度の能力を持っていると紅魔館で話題になった。

それも話に背ひれや尾ひれが大量にくっついて、ミノカサゴみたいなことになった状態で。

……………

……………

……………

「……………はあ」

うな~~~~

この日もあの猫はやってきた。

門番をしながら、肩の上の猫に愚痴を垂れる。
「みんな酷いよね……」

あまりに食べ過ぎてうんうんと囓られながら眠っていたにも関わらず、朝食も大量だったおかげで美鈴の動きは鈍い。

ちなみに、ちょっと美鈴のお腹が出ていることに気づかずにしまった警備が一人、外壁にめり込んでいたりする。

「……そういえばあんたの所為よ」

うな~~~~うな~~~~

「そんな関係ねえっ、って？」

猫語が一瞬分かった。あまり嬉しくない。

「まったく……………」

可愛くないな……と言いつけて、止める。

やっぱり、可愛いから。

「……ん？」

猫の足に目をやった美鈴は昨日との変化に気付いた。

「また怪我したの？」

決して深くは無い傷だが、血が滲んでいる。

手で抱き上げて確かめると、他にも新しい傷がちよこちょこと見て取れた。

「ちょっと、大丈夫？」

うなあ

……困ったやつだ。

美鈴は走って館内に戻り、包帯と消毒液を持って戻った。

「……………あれ？」

——いない。

辺りを見回すも、影も形も臭いも無い。

餌もまだだったのに、どうしてか帰ってしまっただろう。

「どうしたのかな……」

でも、きっとまた来るだろう。

その時に怪我していたらすぐ治療できるように、美鈴は包帯と消毒液をポケットに突っ込んだ。

「……………どうしたの？」

数日後、やってきたブチ猫は元気がなかった。

怪我をしたわけでも無いみたいだが、いつもの気持ちのいい気だるさが、調子の悪さに変わっているようだ。

風邪かなにかと思ったけれど、鼻先は濡れてるし、くしゃみもしない。

……しかし怪我は増えていた。耳も少し欠け

ている。

「どうしよう……私じゃ包帯巻くくらいしか出来ないし……」

ここからあまり離れるわけにもいかない。

だけど取り敢えず、小さな怪我には包帯と消毒を施す。

その間ずっと猫は嫌がっているが、我慢してもらう。

「もうっ、じっとしててば！」

ふにゃー……！

「あっ！」

ほとんど処置が出来ないまま、猫は逃げていった。

「……………」

しかしいい予感がしない。

だけどここからは動けない。

どうすればいいのだろうか……………

「———邪魔したぜ！！」

「……………」

「……………おい、なんだ、いつもみたいに止めないのか？」

「……え？」

白黒の魔法使いが飛び出てきたが、美鈴はほとんど反応しない。

「どうかしたのか？」

魔理沙が美鈴の前に降りてきた。風呂敷には恐らくは図書館から拝借した本が入っているのだろう。

「猫……………」

「あ？」

「猫がね———」

紅魔館の誰かに言っても無駄だから。

せめて数少ない来客にでも言わなければ。

美鈴はあのブチ猫のことを魔理沙に話した。本を借りて（正確には盗みに）来てまさかこんなことになるとはまったくもって思っていなかった魔理沙も、笑うことなくその話をじっと聞くと。

「…………ふうむ。なるほど」
「どうすればいいんだろ……」
「任せとけ——って言えばいいんだが、生憎猫には詳しくないからなあ……………」
「そう……………」
「おいおいそう落ち込むなよ。詳しいヤツ……うん、詳しいヤツなら知ってるぜ」
「本当？」
「ああ。明日にでも連れてきてやるよ」
「……………」
「じゃあなっ！」
魔理沙が去る。門番としてどうかとも一瞬思ったが、今は猫のほうに心配だ。
空の向こうに消えた白黒に期待を寄せながらも、この日はずっと上の空だった。
「——中国？」
「……………」
「あれ……？ ちょっと、中国っ？」
「……………」
「え？」

咲夜が二度呼びかけて、美鈴は顔を上げた。
最近ずっと大量に運ばれる料理をいつも以上に苦しげに平らげて、また仕事に戻ろうとしていたが、足取りとか雰囲気色々危うかった。
「やっぱりあんなものばかり食べてるから……」
「……………」

違う、とも言う気が起きなかった。
「胃腸くらい準備しておくから、ほどほどにね」
あの咲夜に心配されるくらい美鈴は不安に苛まれていた。

どうしてここまで不安なのか。あの猫がどうしてここまで心配なのか。
「……………」
「ああ、そっか」

いつも隣に来てくれて、変わらない舌気さを振り撒いて、愚痴をどれだけ言っても聞いてくれて、餌を遠慮もせずガツガツ食べて。

もうあの猫は、可愛いらしいお客さんじゃなくて、大切な友達になってたんだ

美鈴は門の前であの猫を待っていた。
すると、いつもの方向からプチ猫はやってきた。

…………ただ様子が少しおかしい。
「あつ……」

左の後ろ足を引き摺るように歩いてくる。美鈴は慌てて駆け寄り、猫を抱き上げた。
「酷い……………」

どうなんだろう。折れてはいないようだが、かなり大怪我だ。

応急処置のレベルじゃない。命にこそ関わらないかもしれないが、放っておくことは出来ない。

ただ、どうすればいいのかが分からなかった。
…………

「よしっ」
門に入り、館内に駆け込む。

とすぐそこに探そうとしていたメイド長を見つけて、駆け寄る。
「……………」
「どうしたの？」

「猫です！」
「見れば分かるけど……………」
「怪我してるの？」
「任せてもいいですか！？」

「え……………」
「ええええ、いいけど」
必死な美鈴の様子に圧倒された咲夜は猫を受け取る。

そして、急いで門の前に戻った。こんなときでも仕事は忘れない。
「……………」
「ふう」

取り敢えず安心だ、食材だと勘違いさえしていなければ。

…………
「わあああああああああああああああ
あっ！！！！！」

「……………」
「声大きいわよ」



まさにおちこぼれ、と言う言葉がぴったりのだろう。

「ちょっと前までは喧嘩もしなくて猫の輪から外れたりもしてたけど……………餌を貰って、ちょっとずつ元気になってね。すごく優しくしてくれるって喜んでたの」
「……………」

「それで、最近になって、自分で頑張ってる餌を取れるようになるよとしてのの」

「いい心がけね」
「でもやっぱり弱いから傷ばかり増えて、この前も強引に止めなかったら大怪我してた。だけど、この子はまだ頑張ってる言うの」
「……………どうしてそこまで？」

ここにすればいつだって餌も上げるし、手当ても出来る。

むしろ、もうずっとここにいたっていい。そんなに危ないことを続けるよりも、ずっと安全なのに……………

「……………恩返し、したいんだった。きつと妖怪にはなれないけど……………普通の猫でも出来ることはあるから」

優しい眼差しで、橙はプチ猫の頭を撫でる。
「そんなことしなくてもいいのに……………」

「この子も野良猫だからね、誇りくらいちゃんと持ってるの」
「……………」

「でも、やっぱりここに来たら優しくして上げてほしい。頑張ってるご褒美くらいあげてもいいと思うから」

「……………うん」

「まあ、手当てくらいいつでもしてあげる」
橙は満足げに笑った。

美鈴も、もっとプチ猫を応援してやろうと気を張る。具体的に何するかとかは無いが。

しばらく三人で猫を構っていると、猫が肩の上で立ち上がった。ぐっと伸びをして、地面に飛び降りる。

「じゃあ、帰るみたいだから」
「ありがとう」
「それはあたしの台詞」
「また来てね」
「うん……………あ、名前……………」
「めいり……………」
「中国っていうのよ」
「じゃあ中国さん、また」
「……………はい」

何故かすごく満足げな咲夜の隣で、美鈴はうな垂れながらも手を振る。

猫と橙が見えなくなるまで見送ると、ちょっとだけ新しい気持ちで仕事に戻った。

あの子頑張ってるから、自分はめげちゃいけない。

もう少し辛いことででも堪えられそうな、そんな気分だった。

「……………はあ」

雨。
土砂降りではないが、憂鬱なくらいの勢いで降っている。

美鈴は傘を差して門番をしていた。

「……………」
朝から変な胸騒ぎがしてならないでいた。もやもやが晴れず、心の中を霧が埋め尽くしている。

嫌なことがありそうな不吉な感覚。意識を掠める、あの猫のこと。

いても立ってもいられないのに……………ここから動けない。

また白黒の魔法使いが来てくれればどんなに楽か。

いや、もう紅白でも虹色でもいい。とにかく、自由な人が来て欲しい……………

「……………中国」

「はい？」

咲夜が傘を差して背後にいた。
「変な考えは頭から捨てることよ、嫌な妄想は現実になり易いから」

「はい……………」

……だが、まるで不安を増長させるかのように、雨足は激しくなる。

咲夜は館内に戻った。美鈴も戻ってもいいと言われたが、なんとなく、こっちにいたかったから、残った。

——すると、遠くに黄色い何かが見えた。

段々近付いてくると、それが人の形をしていることが分かった。

走っているらしい……………あ、転んだ。

起き上がりて走り出すと、また転ぶ。

かなり近くまでくると、それがあの橙だというのが分かった。

黄色い雨合羽を着て肩で息をしながら……………美鈴の目の前でまた転んだ。

「大丈夫……………？」

顔が泥だらけになった橙だが、それを拭くこともせずに美鈴に言う。

「大変なのっ……………！」

「え？」

「うっ、だけど、ここから動いたらダメだから……………」

「え？？」

またよく分からないので、説明を求める。

だが、やはりとも言うべきか……………その内容は、不吉な感覚のままだった。

「——あの子が喧嘩して大怪我したのっ！」

「え……………」

雨の音が、強くなった気がした。

「だけど喧嘩には勝って、初めて餌を自分でとって……………」

橙の息が切れる。大きく深呼吸して、もう一度。

「連れてくって言っても絶対に嫌だって……自分であの人のとこまで持っていくって……

……ダメって言っても聞かなかったの、ずっと決めてたことだからって……………」

——初めてとったものはあの人に。

おちこぼれの猫の誓いは、誰が思うよりも強く、絶対的なものだった。

今にも走り出しそうな美鈴、橙は、それを引き止める。

「行ったらダメなの！ あの子の誇りだから……………行きたいけど、絶対ダメなの！」

無理にでも医者连接到れて行こうと思えば出来たのだろう。だが、それをさせないくらい、プチ猫の意志は強かった。

待つしかない、それが辛かった。

——迎えに行ってもしまえばいい、抱き上げて、手当てしてあげればいいんじゃないか？……………だけと。

きっと、あの子はそれを望まない。

「待たなきゃダメなのっ……………いつもみたい

に、足元まで行くからって……………」

橙も泣いている。雨が顔を泥を流して、どれが涙か分からない。

美鈴は、気持ちを押さえ込んで、待った。

それがあの子の意志なら、曲げることの出来ない決心ならと……………

昼だというのに、空は暗い。

雨は止まない。もう土砂降りだ。

……………そして、雨粒の彼方。

微かな色が見えた。

「あ……………」

自然と足が前に出そうになった。だけど、橙が涙を霽しながらその腕を掴んでいる。

……その涙は、事実を一つ意味している。

美鈴も理解はしていた。納得をしていないだけで……………

「もういい……………もういいよ……………」

あの猫はすごく遅い足取りで、こっちに歩いてきている。

フラフラと、今にも倒れそうで、頼りない。
いつの間にか美鈴も泣いていた。傘を捨てて、
自らも雨に打たれて、おちこぼれだった猫を待
つ。

永遠のような時間が流れる。

……………この様子を誰かが見たら、どれほど
滑稽なものに見えるだろう。

むしろ残酷な行為に映っても仕方がないかも
しれない。

それでも、待った。

次第に猫のシルエットが大きくなる。

そしてその全身が白塗れであることも、よく
見えた……………

水が苦手なはずなのに……………体力もないはずな
のに……………傷だらけのはずなのに……………血だって
失ってるはずなのに……………

「頑張って！ もう少し……………もう少しだから！」
かける言葉も変わった。

……………ちょっと猫が笑ったような気がした。

気持ちだけ、歩調も早まる。

……………そして。

真っ赤に濡れたブチ猫は、美鈴の足元で、顎
の力を緩めて、一匹の、小さな鼠を落とした。

……………うなあ

そして雨音で掻き消されそうなくらい、小さ
くか細く鳴くと、満足したように地面に体を横
たえた。

すぐに抱き上げようと美鈴は手を伸ばして
……………止める。

本当に最後の力だったのだ。

猫は……………事切れていた。

「っ……………鼠なんて……………食べられないよお
……………」

美鈴は、泣きながら、精一杯の笑顔を浮かべ
た。

悲しんじゃこの子が報われない。

……………よくやった、お前は立派な野良猫だっ
た。

そう言ってやるのが一番だから。

……………雨が、上がる。

雲が切れて、そこから眩い輝きが溢れた。

諺りを纏って最期を迎えた猫へのご褒美のよ
うだ。

きっと、大好きだった日の光を浴びながら、
昇っていくだろう。

「……………ありがとう……………」

「うえっ……………ひっく……………ううっ……………」

光る空を仰いで、美鈴は、最後に一筋の涙を
流した……………

「……………そう」

湖の辺に作られた簡素な墓の前に、話を聞いた
咲夜と、花畑から摘んだ花を持った美鈴と橙
は立っていた。

本当は花畑の近くに作りたいかったのだが、
やっぱり一日中日の当たる場所がいいと言うこ
とで、開けた場所に作った。

「お……………いっつ……………」

……………何故か魔理沙も飛んできた。特に図
書館に来たわけでもないらしい。

着陸すると、雰囲気を感じたのか口をつくむ。
花を置いて手を合わせる。

穏やかな風と日差しの中、四人の少女は、諺
り高き野良猫の安らぎを祈った。

「……………そういえば中国さん」

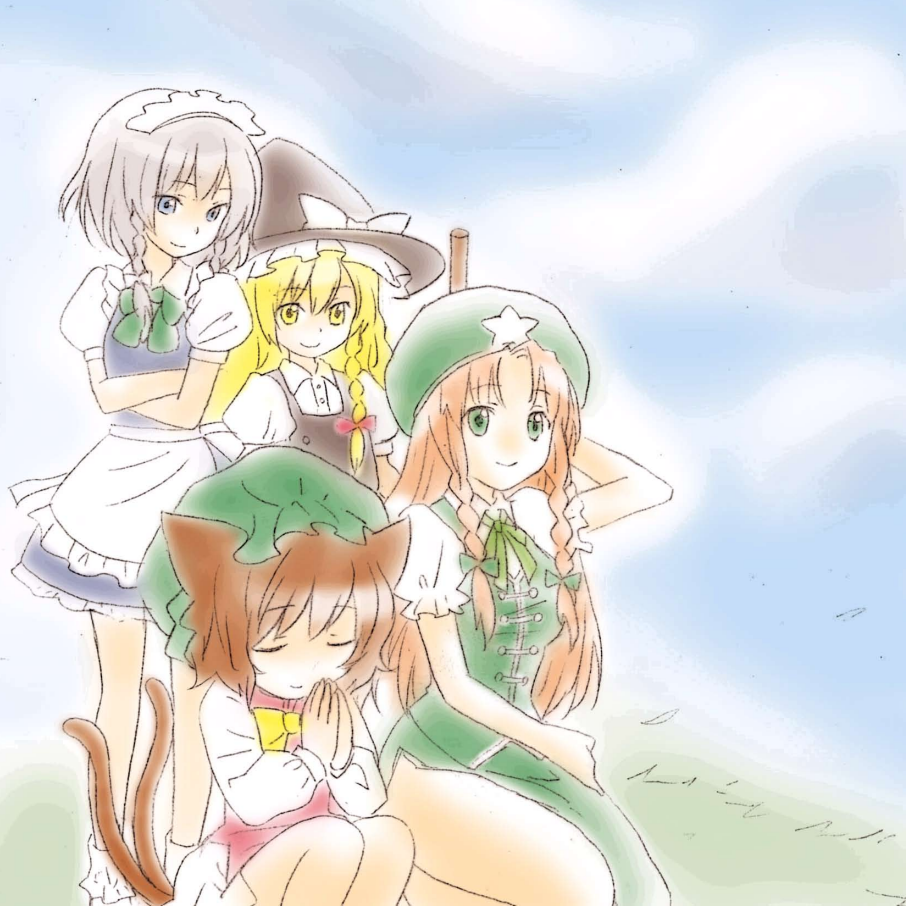
「ん？」

「鼠どうしたの？」

「え……………あ、うん」

美鈴は適当に頷く。

……………適当に捌いて厨房の適当な鍋に放り
込んだのは、秘密だ。





あとがき

Postscript

空蟬

作詞担当

最初にこれを手にとってくれた皆様に感謝と愛と感謝を捧げます。

さていきなりですが皆様はおっぱいについてどのような思いがあるのでしょうか。

例えばエロだったり

例えば美だったり

例えば夢だったり

あの脂肪の塊の何がそこまで人々を引き付けるのか

うらやましい限りです。

私が思うにあれは一種の生命体です。

一人の女の子並みに

あるいはそれ以上に愛されるおっぱいはそこらのRPG並みにエンカウントする敵じゃないかとすら疑うほど愛らしい姿で何とも言えないオーラがあります。

私の頭の中ではあれはもう体にはくっついてませんね。

あんまり語ると変態みたいなのでやめときますが最後に一言

おっぱいは世界を救う

どうもありがとうございました。

白サイ

作詞・ショートストーリー・デサイン担当

人生の半分以上をミリタリーに汚染されてます。

それでも東方のSSを書きました、明らかに無謀ですね、自分もそう思います。

ただ本業のシナリオの進みが酷いのこっちはけっこうな勢いで出来てしまっ
てorz

何足も草鞋履くなよとか言われそうで
すけど……

でもまあ、忙しいのは悪いことじゃない
ですね。だんだんペース配分が出来る
ようになってきたりね。

これからも頑張ります。

それではどうもありがとうございました。

……………うん。中国可愛い。



灯子

ショートストーリー挿絵担当

はじめまして、灯子といいます。

普段は東方とは全く違うジャンルに居ます。

このようなことに参加するのは初めてなのですが、とても楽しく描かせて頂きました！

まだ楽曲のほうは拝聴していないのですが、遠足前の小学生並みに楽しみです。

正直こういったところで何書けば良いのか分からないのですが、これだけは言えます。

中国かわいいよ中国！

藤宮遊鳥

ボーカル・語り・作詞担当

藤宮遊鳥です。

2度目のCD参加となりました。

今回は歌のみならず（しかも1曲じゃないしっ）語りトラックまでやらせていただきました。

ああ、しかも作詞までさせてもらってしまっ。

なんという至れり尽くせり。（違）

前回から変わったところは、東方の曲の有名どころだったらわかるようになったり、永夜抄をプレイしたことですかね。

イージーモードでもフルボッコです。

向いてないみたいです。

でも曲は素敵で弾幕も綺麗なのです。

今回もオケ重視でお聞きください☆
ありがとうございました！

星海月

デザイン担当

みなさまはじめまして。星海月と申します。海月のようにふよふよしています。

さて、そのふよふよしている私ですが、今回は主にデザインを担当させていただきました。印刷される物の作成というのはけっこう久しぶりなので、編集ソフトのマニュアルとにらめっこしたり、お気に入りのCDのジャケットをながめたりして作成を進めていきました。

作業は、基本的におっぱいご担当のKATさんとデザイン案のキャッチボールをしながら進んでいったのですが、私が時々（いつも？）とんでもないボールを投げるので、KATさんにはいろいろとご迷惑をかけてしまったのではないかと

思います。

ご覧になっている冊子が、読みやすいデザインになっていれば、これに優る喜びはありません。

この作品を手にとっていただき、ありがとうございました！

K A T

アレンジ・作詞・おっぱい担当

計画性の無い人間代表 K A T です。

何か空蟬君に冗談で「おっぱいについて語ってくれ！」とやって言ったら本気で書いてくれた訳で、

「自分も何かネタを考えないとー」とか思うわけですが。

いや、俺だっておっぱいへの愛は負けていないぜ！

じゃなくて、このままじゃ「気だるさ日和は皆おっぱいが好き」とか思われそうな訳で。

まあ、しらねw

さて、この作品「Nature」はどうだったでしょうか？

皆が皆それぞれやりたい事をやり、いい意味で闇鍋になりましたので、その味を感じていただければ幸いです。

と、書きながら、まだ自分の作業は終

わって無いですがーorz

あーあ。何時の間にこんなに大きくなってたのか。。

プレス出来なかった事が心に刺さる
orz

さて、一緒に製作した皆様、そして手にとってくれた皆様、本当に有難うございましたー！

P. S

「正直に言おう、今回は製作間に合わなかった。」



もうずいぶんあついですね

はやくスイカが食べたいです

Original songs written by Z U N （上海アリス幻楽団）

All Songs Arranged by K A T

Staff

Vocal

藤宮遊鳥（「三日月ラブソディア」 <http://kanadeyoutagoe.web.fc2.com/>）

Guitar

K A T

Lyrics

空蟬 白サイ 藤宮遊鳥

Short Story

白サイ

Short Story Illustration

灯子（「地元にはありません」 <http://jinx.in/sutana/>）

Jacket Design

白サイ 星海月

Label Design

星海月

人生の気だるさ日和

<http://kat.ushimairi.com/>

本作品は東方Projectの楽曲のアレンジCDです。

このCDを権利者の許可無く貸貸業に利用、個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、ネットワーク等を通じて送信出来る状態にすることを禁じます。

このCDは制作者の意図により、ノイズの含まれている箇所があります。



Nature